

～第20回 日本認知症ケア学会大会での発表について～

ベネッセ シニア・介護研究所

「外国人介護人材」と「リビングラボを通じた社会参画」をテーマとしたご報告

株式会社ベネッセスタイルケアの社内シンクタンクであるベネッセ シニア・介護研究所は、5月25日、26日に開催された第20回認知症ケア学会大会において、現在研究中の2つのテーマについてポスター発表いたしました。

発表の概要は以下の通りです。

- 日本で働く 外国人介護材に対する調査
- 有料老人ホームでの「リビングラボ」を通じた新商品開発と社会参画スキームの構築

発表内容の詳細は次ページ以降をご確認ください。

※上記以外にも、弊社ホームより10件の発表を行っております。

- ・まどか本八幡 「気持ちと感情を引き出すケア手法」
- ・まどか茨木 「ご本人に寄りそうための回想法の活用」
- ・まどか深大寺 「アルツハイマー型認知症の方の「その方らしさ」を活かせる瞬間を引き出す」
- ・グランダ調布 「誤入室が認知症ケアを見直すきっかけに」
- ・グランダ鶴間・大和 「もう一度俳句をつくろう！」
- ・リハビリホームグランダ山手・横浜 「High Quality Of Life (HQOL) を目指して！」
- ・グランダ初台 「地域と連携した自立自発支援とQOL向上の実現」
- ・メディカル・リハビリホームグランダ山鼻 「家族と施設で叶える『その人らしさ』」
- ・くらら門田屋敷 「グループホームにおける、認知症ケアを深める自発支援の検討」
- ・ボンセジュール川口 「アルコール依存と抗不安薬依存からの脱却」

日本で働く外国人介護人材に対する調査 ～定着につながるサポート体制の在り方を探る～

(株)ベネッセスタイルケア 林 奈実

1. 研究の背景

◆ 日本の外国人介護人材受け入れの拡大

在留資格	導入年	送出国	内容	※2019/5/17 時点
特定活動 (EPA候補者)	2008	インドネシア、 フィリピン、 ベトナムの3カ国	「経済連携協定(EPA)に基づく外国人介護福祉士候補者」は、介護福祉士国家試験に合格すれば、何年度でも在留資格の更新が可能。	
介護	2017	ベトナム、中国、 ネパールなど	介護専門学校・大学で2年以上学び、介護福祉士を取得すれば、介護福祉士として就労可。在留資格は何年度でも更新可。	
技能実習 (介護職種)	2017	ベトナム、中国、 フィリピンなど 15カ国	技能の移転を目的とし、最長5年間「実習生」として就労可能。帰国後は、日本で学んだ技能を活かして活躍。	
特定技能 (介護分野)	2019	ベトナム、中国、 フィリピンなど 9カ国	技能と日本語の試験に合格すれば、「特定技能1号」として最長5年間就労可。条件を満たせば技能実習生、留学生、EPA候補者からの移行も可能。	

※身分に基づく在留資格を持った人(永住者、日本人の配偶者など)、留学生(資格外活動として週28時間まで)も、介護施設での就労が可能。

- ・ 日本政府は、介護分野での外国人受け入れ人数目標を「1年目で5千人、5年目までに最大6万人」と設定
- ・ 技能実習生受け入れでのコンプライアンス違反や、労働条件の良い諸外国の存在もあり、日本は敬遠される傾向

外国人介護人材 (Foreign Care Worker:以下FCW)から選ばれるための環境整備・受け入れ体制づくりをするには、**FCWの視点から見た「日本の介護現場の働きやすさ・働きづらさ」を把握することが不可欠**

2. 研究目的と方法

目的

FCWが日本の介護現場で長く快適に働くためには、**受け入れ側には何が必要か**を明らかにする。

研究方法

日本で就労中のFCWに10ヶ所でヒヤリングを行い、合計22人の協力を得た。「受け入れ側にされて嬉しかったこと/困った・嫌だったこと」についてヒヤリングした結果を、①仕事、②職員とのコミュニケーション、③日本語・日本語学習、④人間関係、⑤職場の規則・待遇、⑥日本の文化・考え方、⑦日本での生活の7項目に分類した。

倫理的配慮

FCWに学会発表について事前に説明し、書面でヒヤリング結果公表の了承を得た。

3. 結果

- ◆ 出てきた意見をヒヤリングごとに集約した結果、ポイントとなる意見が合計**73**抽出された。
- ◆ それらを上記の7項目に分類した結果、意見が多かった項目は「**③日本語・日本語学習(20)**」「**④人間関係(15)**」「**①仕事(13)**」「**②職員とのコミュニケーション(12)**」であった(カッコ内は、それぞれの分類の意見の出現頻度を表す)。
- ◆ そのうち、「**嬉しかったこと**」の回答が多かったのは「**①仕事(8)**」と「**④人間関係(8)**」、「**困った・嫌だったこと**」の回答が多かったのは「**③日本語・日本語学習(19)**」「**②職員とのコミュニケーション(12)**」であった。

嬉しかったこと	①仕事(8) <ul style="list-style-type: none"> ● 困っている時に、周りの職員が助けてくれた(1) ● 職場の一員として認められたと感じた(6) 	④人間関係(8) <ul style="list-style-type: none"> ● 自分は歓迎され、受け入れられていると感じた(4) ● 自分の母国に興味を持ち、知ろうとしてくれた(2) 	
	困った・嫌だったことと要望	③日本語・日本語学習(19) <ul style="list-style-type: none"> ● 日本語が不十分ななか、言ったことをそのまま受け取られて誤解される(6) <p>(例) 「Aをして下さい」と頼んだら、「私はBをします」だって。やりたくないってこと？ 生意気!</p> <p>「Bを先にした方が良くと思う」と伝えたかっただけなのに…</p> <p>⇒何年経っても日本語は難しい。「言いたいことはこれで合っている？」と確認してほしい</p>	②職員とのコミュニケーション(12) <ul style="list-style-type: none"> ● 間違い等を直接指摘されずに、後で上司や先輩経由で注意される(4) <p>(例) 他職員の職員から聞きましたよ！△△しなかったそうですね!</p> <p>なぜ、直接注意してくれなかったんだろう…</p> <p>⇒自分が間違ったことをしているのかどうか分からないので、思っていることや注意や指摘は本人に直接伝えてほしい</p>

4. 考察と今後の展望

「嬉しかったこと」として「仕事」と「人間関係」が、「困った・嫌だったこと」として「日本語・日本語学習」「職員とのコミュニケーション」についての意見が多く挙げられたことから、以下のような取り組みが必要であると考えられる。

①FCWの業務の習得度に合った仕事・役割を任せること

- ・ 成長に応じて仕事の幅が広がることが、「特別扱いされていない」「職場の一員として認められた」という気持ちにつながり、やりがいや自己効力感の向上に寄与すると考えられる
- ・ 「困った時はフォローする」ことを前提として、FCWにできる仕事は、日本人職員と同じように任せることが大切である

②コミュニケーション方法について、双方に情報共有すること

- ・ FCW受け入れ前に施設内で、FCWとのコミュニケーション時の注意点について、上記のようなポイントを共有しておく
- ・ FCWにも、日本独特ともいえるコミュニケーション方法やマナーなどについて事前に情報提供することで、そのような場面に遭遇した際の心構えをしてもらう

ヒヤリングを通じて感じたのは「自分で努力して、日本の介護も日本語・日本文化も学び、成長し続けたい」というFCWの強い意志である。しかし双方が気持ちよく働くためには、FCWの努力だけに頼るのではなく、受け入れ側も日本語教育や日常のフォローに加え、FCWが成長を実感できる環境やコミュニケーションを取りやすい環境を整える、といった努力や工夫をすることが重要である。

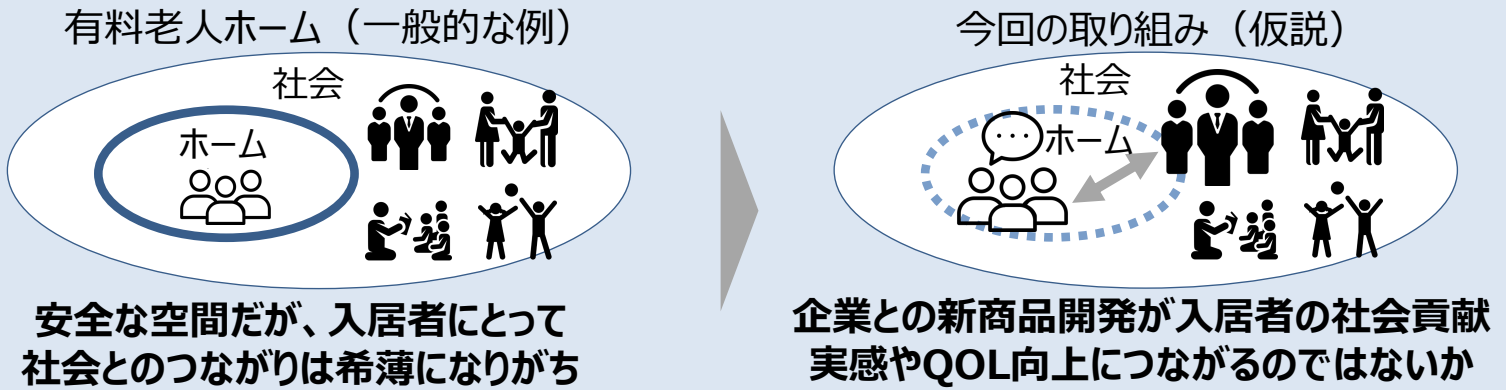
このような取り組みは、風通しの良い職場作りなどにもつながり、FCWだけでなく、日本人職員の働きやすさにも繋がるはずである。

今後は、本調査結果を活かした弊社でのFCW受け入れと、その効果検証を行っていく。

有料老人ホームでの「リビングラボ」を通じた 新商品開発と社会参画スキームの構築 ——入居者にとっての「楽しみ」「生きがい」へ——

原田文雄¹⁾, 太田雄介²⁾, 田中奈々恵²⁾, 石田 稔³⁾, 白倉重樹³⁾
1)(株)ベネッセスタイルケア ベネッセ シニア・介護研究所 2)(株)ベネッセスタイルケア グランダ初台 3)(株)山忠

目的



方法

- ・「リビングラボ^{※)}」という企業とユーザの共創型開発手法を採用
- ・2018年9月から12月まで計5回・のべ37名の入居者が参加（うち半数程度の方が認知症またはMCI）
- ・靴下の新商品企画や試作品に対する意見交換を行った

※)一般的には「新技術やサービスの開発にて、ユーザや市民、企業も参加する共創活動。またはその活動拠点」のことを言う。生活空間（Living）が実験室（Lab）というのがリビングラボの基本的考え方

*【倫理的配慮】協力施設に取り組み内容の公表について了承を得た



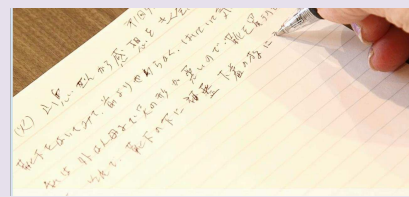
結果

- ・入居者からは回を重ねるにつれて活発な意見が出るようになった
「（深く前かがみになって履くのが難しいので）履きやすいものがいい」
「むくみがあるので、きつく締め付けないでほしい」「薄くてオシャレなものがほしい」
「洗濯で紛れてしまうかもしれないので、名前を書けるようにしてほしい」…など
- ・中でもT様（80歳代・女性）は普段は部屋にこもりがちな方だったが毎回参加されてノートにメモまで取られていた
- ・取り組みを通じて入居者からは下記のような声が聞かれた

意見を言うことで、
役に立てるのは嬉しい

いつも部屋でごろごろして
いることが多いが、この会は
楽しいし、来た甲斐がある

「私の意見で作ってもらった
のよ」って言えるなんて…
こんなこと普通じゃありえない



考察

- ・認知症の方でも靴下の試作品に対して意見を出すことができた
- ・結果、高齢者の本質的なニーズを捉えた新商品（履きやすくて、つまずきにくい『はつだいの靴下』が開発された）
- ・自分の意見が商品に反映されることで「楽しみ」や「生きがい」につながる、新たな社会参画スキーム構築の可能性が認められた

